Year: 2026
Location: Japan
Program: Accommodation

サン・ヴィンチェンツォ・デ・パオリ教会・教区複合施設



オスティア地区は、均質な集合住宅が立ち並ぶ単調な都市景観によって特徴づけられている。本計画は、そのような環境の中で地域コミュニティの新たな拠点となり、人々が集い、祈り、未来への希望を共有する象徴的な教会を提案するものである。建築は周囲から孤立したモニュメントではなく、地域に新たなアイデンティティを与え、人々の暮らしに寄り添いながら未来を照らす存在となることを目指している。

デザインの出発点となったのは、「潜在する十字架」という考え方である。キリスト教初期において、十字架は今日のように明確な宗教的象徴として表現される以前、信仰を静かに示す控えめな印として存在していた。本計画では、その歴史的な背景に着想を得て、十字架の形態を抽象化し、圧縮・変形することで菱形の平面を生み出している。地上レベルでは十字架の形は容易に認識できず、その存在は建築の中に潜在している。しかし建築が上方へと立ち上がるにつれ、その形態は徐々に展開し、屋根は最終的に明快な十字架として現れる。この変容の過程は、地上から天へと向かう精神的な上昇を象徴すると同時に、装飾ではなく空間そのものによって信仰の意味を表現している。

建築の構造もまた、この幾何学的な変化から生み出されている。菱形平面から十字形の屋根へと移行する複雑な形態を、できる限り合理的かつ経済的な方法で実現するため、直線状の木梁を積層しながら少しずつ位置をずらして配置している。そのシンプルな反復によって、緩やかな曲面をもつシェル状の構造が形成される。木材の使用は教会内部に温かく包容力のある雰囲気をもたらすだけでなく、建設時の炭素排出量の削減、コストの抑制、工期の短縮、さらには周辺環境への負荷低減にも貢献する。環境性能と施工合理性、そして豊かな空間体験を両立する構造システムである。

この教会を特徴づけるもう一つの重要な要素が光である。菱形平面の四隅は切り取られ、細長い三角形の開口として入口や窓が設けられている。これらのファサード全面にはステンドグラスが用いられ、自然光を建物の奥深くまで導く。一般的な教会では著名なアーティストによる作品が使われることが多いが、本計画では地域社会とのつながりを重視し、敷地周囲の仮囲いに地元の若者たちが描いたグラフィティをステンドグラスへと再構成することを提案している。彼らの創造的な表現は光へと変換され、教会内部を照らす存在となる。自らの作品が人々を包み込む希望の光となることで、若者たちは誇りと帰属意識を育み、この建築はコミュニティそのものの創造性と未来への願いを映し出す象徴となる。